空手道専門分科会企画

テーマ「中学武道必修化」および「空手道と健康」

日時：平成 27 年 9 月 10 日（木）13：30―15：30
場所：日本体育大学　世田谷キャンパス　教育研究棟 2 階　1202 教室

講師：嘉手苅 徹（琉球大学非常勤講師）
「沖縄県における中学校武道の空手道採用状況について
　―近代沖縄の学校教育への空手導入を手がかりに―」

沖縄県では、中学校の空手道授業実施校は 127 校、約 83%であった（2014 年公益財団法人全日本空手道連盟調べ、『あゆみ』vol.11，2015，１月号）。全国平均では 2%に満たない中で、どうしてこのような高い採用率となっているのだろうか。この理由を明らかにするには、近代沖縄における空手発祥の歴史的背景と経過を踏まえて、学校教育への導入と地域行事等との結びつきにその手がかりがあると考えられる。

講師：豊嶋　建広（麗澤大学）
「空手道と健康
　―認知症予防としての中高年のための空手道―」

高齢社会を迎えて、現在認知症の高齢者は約 460 万人、その予備軍は 400 万人と言われている（H25 厚生労働省平成 24 年 8 月 24 日発表資料）。そして、有酸素運動（『認知症疾患治療ガイド 2010』）や知的活動・余暇活動を行う人の認知症発生率が低いことがわかっている。そこで、空手道の型を有酸素運動および知的活動として行うことで、認知症予防につながらないかを検討する。

剣道専門分科会企画

テーマ「剣道とマスメディア　ーテレビ放送からみた剣道ー」

講師：太田雅英氏

（平成 10 年、NHK 入局。現在は大阪放送局アナウンサー。大相撲を中心にスポーツ中継を担当。剣道では世界剣道選手権、全日本剣道選手権、国体、高校総体の中継担当。にんげんドキュメント「ただ一撃にかける」、スポーツ大陸「己に克て」、関西クローズアップ「明日に向かって撃て」などの制作に関わる。剣道五段）

司会：長尾　進（明治大学）　大石純子（筑波大学）

日時：平成 27 年 9 月 10 日（木）14：00―15：30

場所：日本体育大学　世田谷キャンパス　研究棟 2 階　2201 教室

スポーツとマスメディア（新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等）との関係については、スポーツ社会学やスポーツビジネス論等の立場から、これまでにも様々に論じられ研究が進められてきた。一方で、武道とマスメディアの関係については、あまり正面から取り上げられてきていない、と言ってもいいであろう。

近代において武道とマスメディアとの関係が最も顕著になったのは、昭和天覧試合（昭和 4 年）においてであり、新聞各紙がこぞって取り上げ、また大日本雄弁会講談社が大会前から雑誌での特集を組み、終了後は大部の刊本『昭和天覧試合』、同附録『武道宝鑑』を発刊したことなどを契機として、戦前における武道ブームの火付け役となった。戦後、剣道はテレビドラマやマンガ・アニメ等でもとりあげられ、昭和 40 年代における武道ブームをけん引した。また、昭和 40 年代後半から 50 年代にかけて発刊された月刊誌が、剣道の普及に貢献してきた面も見逃せない。

しかしながら競技としての剣道を見た場合、オリンピック種目である柔道と比較してみれば、マスメディアにおける露出度には大きな開きがある。一方で、先般の第 16 回世界剣道選手権大会においては、久々の日本開催ということに加え、代表選手のなかに学生選手が複数名入ったこともあり、NHK をはじめとして民放においてもこれまでにない取り上げ方であった。

武道のなかでもとりわけ伝統を重んじる剣道は、とくにテレビという媒体における取り上げ方において、ある種の難しさが潜んでいよう。また、テレビ放送という立場からみた場合、コンテンツとしての剣道はどのような価値をもつものであるのか。あるいは、テレビの取り上げ方が剣道に影響を与えうるのか等々について、剣道専門分科会としてアカデミズムの立場からこれを機に考えてみたい。

講師の太田雅英氏は、全日本剣道選手権大会をはじめとして長年剣道の放送や番組制作に関わってこられ、先の第 16 回世界剣道選手権大会の本放送をご担当された方である。氏のご経験やテレビ放送というお立場からみた剣道について、縦横に語っていただく予定である。剣道専門分科会員のみならず、多くの学会員の参加を期待している。

弓道専門分科会企画

テーマ「射法の多関節運動系としての曖昧性と秩序化」

講師：　佐藤　明（東北大学）
司会：　加賀　勝（岡山大学）

日時：平成 27 年 9 月 10 日（木）13：00―14：30
場所：日本体育大学　世田谷キャンパス　教育研究棟 2 階　3201 教室

射技は再現性の高い動作を介して、矢を的に中てる運動であるが、多関節で自由度の極めて高い身体を、合理的な規則に従って統合していくことが課題となる。射法はその規則を示唆するものである。身体は関節の数が約 265、骨格筋の数が約 400 あり、いずれの要素も射技に何らかの関与をしていると考えられる。

一つの関節を制御する筋は複数関与する場合が多く、仮に A,B,C３つの筋が関係して 100 の出力を出すときに、A30,B40,C30 の場合もあれば、A0,B50,C50 の場合もあり得、その組み合わせは計り知れない。運動の多様性は豊かな可能性を秘める一方、動作の不安定性、曖昧性を含み、動作の再現性を損なう要因ともなる。無秩序な運動に秩序を与え、目的の動作を創造するために先人は知恵を残している。その一端に触れ考察する。

障害者武道専門分科会企画

テーマ「社会の進行と共に変わる障害者武道の明日を考える
－ 中学武道必修化で実現させるインクルーシブ教育 －」

パネリスト：　徳安　秀正（有明医療大学）
濱名　智男（日本文化大學）
久保山和彦（日本体育大学）
松井完太郎（国際武道大学）
コーディネーター：森脇　保彦（国士舘大学）

日時：平成 27 年 9 月 10 日（木）13：00―14：30
場所：日本体育大学　世田谷キャンパス　教育研究棟 2 階　2206 教室
参加無料（一般の方も参加できます）

障害者基本法も改正され(2011)、インクルーシブ教育（包括教育）の実現にむけて学校現場は動き出しています。もちろん、この包括教育への動きは、障害がある者とない者への教育の場が統合されるだけで実現するものではありません。しかし場合によっては、合同授業も十分に可能性がありますし、また既に一般クラスに障害がある生徒がいることも珍しいことでありません。中学校武道必修化（2012）は、このような状況にも対峙しているのです。われわれは、障害ある生徒に対して見学・レポートで代替する手法は取りたくないと考えています。

武道の動きは、様々な状況下で如何に対処するかを切実に考える武術を起源とし、例えば、座った状態や、片腕だけが使える状況などは、はじめから織り込み済みだからです。障害者への指導法は初心者への指導法にもなり得るはずです。障害者の武道への参加が武道の発展にも資するという関係が成り立つ道を探りたいと考えます。

中学校で障害ある生徒に柔道を指導している現場からの報告（徳安）、スペシャルオリンピックスにおける柔道審判の立場からの報告（濱名）、障害特性による柔道寝技合同教育の可能性に関する報告（久保山）、空手道のオリンピック種目化が有力視される中で見えてきたパラリンピックにおける階級・判定法に関する報告（松井）から、障害者による武道と健常者による武道の「包括化」のあり方を探るシンポジウムを開催します。

この分科会で目指すものは、本来的に武道の知恵の中に包括されてきたはずの障害者武道を見つめ直すことにあります。そのためには世界中にある現場の知見を結集することが必要となるはずです。

障害者武道に関する調査・研究が進めば、各武道専門分科会の中に取り込まれることが理想であり、その意味では、この専門分科会は各武道に奉仕し、いずれは解散することを目指す分科会となります。

会員以外の参加も無料です。多くの方の参加をお待ちしております。

同会場に於いて平成 27 年障害者武道専門分科会総会も開催します。

なぎなた専門分科会企画

テーマ「武道必修化―なぎなた指導の成果と検証
―アクティブラーニングの実践―」

講師：佐藤　智尚
（教諭（地歴・公民）・
文化学園大学杉並中学・高等学校なぎなた部顧問）

日時：平成 27 年 9 月 10 日（木）14：00―16：00
場所：日本体育大学　世田谷キャンパス　教育研究棟 2 階　3202 教室

最近の学校現場において、難解なことを嫌い、プロセスを抜きにして結果だけを求める生徒の気質（わがまま）が目立つ。情操面へのストレスとなる教えは敬遠され、人の道としての道理がとおらない。サービス過剰な現代社会の病理と言える。平易で略式なものだけが生き延びようとしている今日、耐性は明らかに鈍化した。日本の子供達は、自分の努力をもって能動的に行動する必要が減り、ひたすら便利を求め、受動的でいられる環境に慣れているからである。何をどうすることが正しく、間違っているかはわかっていても実践知にまで至っていないので知行合一の精神に欠ける。正常な状況を取り戻すため、今まで実践して来た薙刀部の根気を身に付ける教育方針と実践例を授業にも取り入れてみた。授業態度は実に真剣で、生徒自身も、人として必要不可欠な態度：美しい所作・禅定・礼儀・道理・守・破・離、惻隠の情・下手を固める弊害などを理解し身に付けたいという積極的な願望が育った。なぎなたの授業は武道であり、日本独自の伝統文化・精神の修得時間であることを理解させた。形（しかけ・応じ）の修得においては、耐性が低く、理合や道理を無視して力や運動神経の発揚だけに頼る生徒は、傍若無人振りを発揮する傾向となるため、心するようにと先手を打ち、指導した。

なぎなたの技は修得が難しいだけに、生徒自身の耐性や達成感、主体性を涵養できた。面倒くさいことを厭う現代っ子にけじめ・根気・覇気を発揮させる授業展開ができたと言える。形の指導では、しかけと応じの修得過程で、お互いの改善点や技を確認させ、自己責任感と協働が必要な**アクティブラーニングの端緒**が芽生えていた。

根気力を身に付ける教育指導（薙刀部士規十二則：文杉独自の部則）より

柔道専門分科会企画

テーマ「受身の最新研究から学校柔道安全確保の道を探る」

講　師：籔根敏和（京都教育大学）
　　村山晴夫（獨協医科大学）
司　会：桐生習作（公益財団法人講道館）

日時：平成 27 年 9 月 10 日（木）13：00―14：30
場所：日本体育大学　世田谷キャンパス　教育研究棟 2 階　1201 教室

＜趣旨＞

近年、本部及び本会において行政、現場教員、研究者など様々な方面から有識者を招き、中学校武道必修化をとりまく現状とその課題について理解を深めてきた。柔道の学術団体としての本会の使命を鑑みれば、学校柔道の課題に対して最新の研究成果を共有し、また斯界の有識者を交えた活発な意見交換が必要といえる。

教員の指導力、設備・施設、行政のサポートなど、本会で取り上げるべき課題は多々あるが、限られた時間の中で総論的に取り上げれば議論が深まらず、また内容がこれまでの企画と重複してしまう懸念もある。

そこで今回は受身をテーマとし、本テーマに関する最新の研究成果を有する研究者を招いて講演いただく。受身は初心者指導法、基本動作、安全確保など、学校柔道のあらゆる分野を包含する重要な概念である。講師の方々の研究成果とその姿勢を通じ、改めて柔道の専門家が学校柔道の安全確保に向けて果すべき役割と、そのために必要な取り組みについて考える場としたい。

＜プログラム＞

13:00　趣旨説明・講師紹介
13:10　村山晴夫氏　講演「受身がもたらす頭部への衝撃緩衝メカニズムを探る」
　　質疑応答
13:50　籔根敏和氏　講演「よい受身動作とその学習法」
　　質疑応答
14:30　まとめ
　　※終了後、総会

＜参加資格＞

日本武道学会員、本会員または第 48 回日本武道学会大会の参加費納入者

＜講師略歴・講演要旨＞

藪根　敏和　YABUNE Toshikazu

兵庫県出身。講道館柔道六段。京都教育大学教授。修士（体育学）。「発見型柔道授業プログラム」の開発と発信を図る。武道必修化に伴い、関西を中心に指導者研修会の講師としても活躍中。

運動学習とは、一般に「視覚等からの情報を運動像としてイメージ化し、それを身体で再現して、さらに自動化させる過程」と解される。従って、運動学習においては、その前提として、基準となる動きの指標が明確になっている必要がある。この動きの指標とは、優れた動作に共通する構造的な特徴、換言すれば、それは「よい動きの構成要素」ともいえるもので、この指標が明らかになれば、学習者は到達目標を持つことができ、それに近付けるように努力することができるし、指導者は練習方法の工夫や、動作のチェックポイントの発見ができるようになる。

受身は、柔道を安全に学習するために欠くことができない技術である。しかし、「柔道の受身は腕で畳を強く叩く動作である」という既成概念にとらわれるためか、はたまた、「後ろ受身、横受身、前回り受身の順で単独練習を進めていく」という練習方法が確立しているためか、指導者や研究者の関心は「畳に衝突した際の衝撃をどのような動作で分散させるのか」という本質的な問題の解決には向かわず、特に対人での受身動作に関しては、運動学習の核となるべき動作の指標が明らかになっていないのが現状である。このような現状のままで学習成果を期待することは、ナンセンスであろう。

そこで今回は、受身の学習目標となる「よい受身動作」とはどのような動作なのかを解説するとともに、その動作獲得のための学習方法の一例を紹介したいと思う。

村山　晴夫　MURAYAMA Haruo

茨城県出身。講道館柔道七段。獨協医科大学准教授。博士（医科学）。本会理事。2013 年 4 月より科研費基盤研究（C）「柔道における頭部外傷発生メカニズムの解析と効果的予防対策の確立」をテーマに研究中。

柔道における死亡事故の多くは頭部外傷に起因し、投げられた際の畳への頭部強打が主な原因である。このような重症頭部外傷事故が顕在化しているのにも関わらず、柔道の投技による頭部への衝撃力については、これまで科学的に解明されてこなかった。すなわち、教育現場で起きている重症事故要因を明確に特定できず、効果的な予防策を講じるためのエビデンスが欠如している状況である。このような背景のもと、私たちの研究チームは“柔道における頭部外傷発生メカニズムの解析と効果的予防対策の確立”というテーマに着手した。具体的には、柔道の投技で投げられる際に生じる頭部加速度動態から頭部外傷リスクを定量評価することで、受身を遂行できない状況での頭部外傷発生機序について解明することである。まず、自動車安全対策分野の方法論を適用し、自動車衝突試験用歩行者ダミーを用いることで解析を行った。これにより、受身という技術を駆使することなく頭部を打撲した場合の頭部の衝撃力（頭部加速度など）が数値化される。そして、“人”による受身技術を駆使した場合の頭部衝撃力をも測定し、ダミー実験の結果と対比させることで、受身がもたらす衝撃緩衝効果の解明にも取り組んでいる。今回、現時点で得られている最新の研究知見を紹介するとともに、“受身”という技術の重要性について再考する機会としたい。